

「近代のヨーロッパをどのように学ぶか」

県立港北高等学校 大賀 佐和子（1日目）

県立氷取沢高等学校 佐藤 靖彦（2日目）

群馬県立前橋高等学校 安達 淳（3日目）

<はじめに>

今年度も高大連携講座は栄光学園高等学校を会場にお借りして、3か日間の日程で行いました。この講座は、平成19年（2007年）から始まり、2011年からはNPO 神奈川歴史教育研究会の協賛を受けて一層充実した講座となっております。午前中は、同じテーマで、高校の教員と大学の教員が、高校生を対象に授業を行い、午後は、高校・大学の教員が合同で研究協議を行うという形で行っています。最近まではアジア史を中心に扱ってまいりましたが、昨年度からヨーロッパ史を扱っています。今年度の次第は次の通りです。

8月6日（月）「近代のイギリス」

講師 中村 武司（弘前大学） 大賀 佐和子（県立港北高校）

8月7日（火）「近代の東欧」

講師 古谷 大輔（大阪大学） 佐藤 靖彦（県立氷取沢高等学校）

8月8日（水）「近代の中東欧」

講師 中澤 達哉（早稲田大学） 安達 淳（群馬県立前橋高等学校）

昨年度から、本研究報告においては、各日の報告を高校側の講師が行っています。報告者によっては、大学の教員との事前の連携についても述べており興味深いものになっていると思います。ぜひご一読ください。また最終日は時間に余裕ができたため、古谷先生と中澤先生が2人の掛け合いで進めるコラボレーション講義を行いました。その様子についても、報告されています。

<1日目 近代のイギリスをどう学ぶか>（報告；大賀 佐和子）

〈午前〉19世紀のイギリス〈自由主義改革と大英帝国の繁栄〉 大賀佐和子（港北高等学校）

発表は、一斉授業の形式で展開した。前半の30分は、“イギリスの自由主義改革”をテーマに進めた。ナポレオン戦争後には地主保護の政策が行われていたが、ウィーン体制が崩壊を始める中で産業革命の進展や産業資本家の台頭を背景に審査法が廃止され、カトリック教徒解放法が成立し、選挙法改正へとつながって行く過程を説明していった。続けて東インド会社の貿易独占権の廃止、穀物法の廃止、航海法の廃止、奴隷貿易の禁止、団結禁止法の廃止、工場法の制定など19世紀イギリスの自由主義改革の流れを確認した。

後半の30分は“大英帝国の繁栄ーヴィクトリア女王の時代”がテーマとなった。図版や写真資料を別添の紙資料でたどりながら展開した。夫のアルバート公の全面的な支えにより開催されたロンドン万博の様子や、「自由党と保守党」という二大政党による議会政治の展開と「選挙法改正」による選挙権拡大の様子、労働組合運動の展開の中で後に「労働党」が結成されること、アイルランド問題などにふれ、60分ちょうどで終了した。

近代のイギリスー議会・選挙・ジェンダー 中村武司（弘前大学）

大学教員の立場から、大学のある弘前市の人口、岩木山、“ねぷた”、三内丸山遺跡、十三湊、太宰治などの紹介があった。さらに続けてイギリスという言葉が1707年まではイングランド、以降はU. K. を指すこと、現在のユニオン・ジャック（国旗）が成立したのは1801年以降であることが説明された。

発表は、「イギリスは議会制民主主義の祖国なのか？」という問いから始まった。イギリス（UK）で普通選挙権が成立したのは、男性が1918年、女性が1928年で、資料のある15ヶ国の中でも遅いほうである。男子普通選挙権成立の「遅さ」は政治に参加する権利の基準やジェンダーなどの問題と密接に関連しており、独立した男らしい人間こそが政治に関わってよいという考え方が強かったためであると説明された。

続けて『長い18世紀イギリスの議会制度』と題し、貴族院（上院）と庶民院（下院）の成り立ちと庶民院の複雑な選挙権、選挙資格について話が続いた。その中で、名誉革命（1688-9年）以降議会在が毎年開催されたことの意味する長い18世紀の対仏戦争と財政軍事国家の形成、議会による政治のコントロールの重要性、「首相」の存在にもふれられた。

また、3つめの『18世紀のイギリス議会と選挙』では「競争選挙」は共同体の意見の分裂を意味するため、30%程度しか行われなかったことや1872年の秘密投票法の成立までイギリスでは公開投票が原則だったこと、選挙が有権者にとって「独立」や「男らしさ」を確認する機会でもあったことが示された。

4つめに『選挙法改正の意味』として「男らしさ」と「階級」の再定義の中で選挙法改正が行われたこと、有権者資格が調整・修正される中でイギリスの選挙権が拡大してきたこと、1918年の選挙法改正には1916年の徴兵制の導入と総力戦体制への移行が反映されているという見方が示された。

〈午後〉午後は高校生のアンケートと質問を基にした協議が行われた。前半の高校教員の発表に関しては、「分かりやすかった。」「高校の教科書ではほんの少ししかふれないロンドン万博のことが詳しく取り上げられていて興味深かった。」などの意見が寄せられた。また、質問としては「女王の支配力に関しては、君臨すれども統治せずといえたのか？」という質問が寄せられ、「ある程度の影響力はあったと考えられる。」と答えた。

中村先生の発表に関しても、高校生から多くの質問が寄せられ、丁寧に解答されていた。ただ、高校の教科書等でよく使われる「国王は君臨すれども統治せず」という表現に関しては、イギリスが発祥の地ではなく、16世紀のポーランドーリトアニア王国において機能した政治の仕組みであるとの指摘をいただき、「なぜイギリス政治の典型のような使われ方をするのか」との疑義をいただいて、発表者としても反省した次第であった。イギリスの選挙制度、二大政党の実態、ヴィクトリア朝の政治の諸問題についても、活発な意見交換が続き、得られるものが大きかったと感じた。

<2日目：近代の北欧をどう学ぶか>（報告；佐藤靖彦）

高大連携講座の2日目のテーマは「北欧」であった。しかし、北欧の歴史や研究が少ない中、どのような発表をするのか、というテーマを模索していく中、同日にスウェーデンをテーマに発表する古谷先生と連絡を取った。そこで、古谷先生の発表は「大英帝国のアジア進出を北欧が補完した」というテーマで行い、私はその前段階として大英帝国のアジア支配の特徴を授業として行う、ということが決定した。

前半の授業は「大英帝国のアジア“支配”と日本の位置づけ」というテーマで行われた。イギリスは植民地を拡大していく中で、直接イギリスの支配に置く「公式帝国」とイギリスの経済力で影響下

におく「非公式帝国」の二つのパターンで他の地域を支配している。特に、19世紀以降、自由貿易が拡大し、その後、19世紀後半の「大不況」を経て、「世界の銀行」となったイギリスは金融や経済力で多くの地域に影響を与えられたことになった。それを可能としたものとして、国際金本位制、鉄道、海底電信ネットワーク、国際郵便制度などの「国際公共財」があった。アジアにおいても、このイギリスの影響を大きく受けた。アジアでは、1890年代以降、日本が工業化していくにつれ、インド—中国—日本—東南アジアを結びつけるアジア間貿易が成立し、その中心となる製品は綿糸であった。こうした、アジア間貿易を通し、イギリスは日本に対し工業機械の輸出や資本の投入などを行うことにより、利益を得ることができ、アジア間貿易が発展すればするほど、イギリスの資本が拡大するという好循環を生んだ。その中で、アジア間貿易の中心となった日本とイギリスの経済的結びつきは強くなって行き、1902年の日英同盟にも繋がった。

後半の古谷先生の授業は、「イギリスのアジア進出を北欧が補完した」、というテーマで行われた。まず、近代の北欧が高校世界史で扱われないのは「市民革命を経てからの国民国家形成」のモデルや高校世界史で学ぶ近代の富国強兵のモデルから外れているためであると述べた。こうした、北欧が近代、イギリスのアジア進出を知識と技術の二つの面から支えた。

まず、知識の面からイギリスのアジア進出を支えたのはスウェーデンである。18世紀のスウェーデン博物学者であるリンネは、世界中を探検し、現地の植物・動物・鉱物の情報を記録、さらにそれが現地の生活の中でいかに活用されているのかを現地語に基づいて調査するというフィールドワークによる情報収集の方法を確立した。このリンネの方法に基づく情報収集が東アジア進出をする際、現地的確な情報を必要としていたイギリスに重用された。実際、18世紀に日本を訪れ、調査したスウェーデン人がその情報をイギリスへ提供するよう要請されている。

次に、技術の面からイギリスのアジア進出を支えたのはデンマークである。デンマークの電信企業「大北電信会社」は1871年に長崎—上海間の海底電信ケーブルを敷設した。これによりヨーロッパからユーラシア大陸を経て、世界的な電信ネットワークに日本が組み込まれた。電信ネットワークは金融の国際決済や貿易の国際取引をする際に重要な役割を果たすため、イギリスのアジアにおける経済進出には欠かせないものであった。こうした背景には1864年のデンマーク戦争による敗北から「小さな国民国家」として自立していく為に、イギリスの自由貿易体制とポンドを中心とした金融ネットワークを確立したイギリスの巨大な経済力に依存することを選択した、という背景がある。

古谷先生の授業は上記のような内容で行われたが、その根底にあるのは従来の高校世界史で学ぶ近代ヨーロッパだけからでは見えない歴史があり、それを取り上げることで多様な視点をもった世界史を構築する、ということであると感じた。この授業を通し、あらためて従来の高校世界史で述べられてきた、「近代化」「国民」「国家」というテーマを見直し、視点を変えて考え直す重要性を感じることができた。

午後におこなわれた先生方の討議においても、この点に関しての質問や意見が多く出された。また、「アジア間貿易」が日本史と世界史をつなげる重要なテーマであることが共有され、私自身、今後、「アジア間貿易」の研究をさらに進めていくことが必要であると感じた。

<3日目 近代の中東欧をどう学ぶか> (報告; 安達 淳)

午前の高校教員による授業を、「歌曲「二人の擲弾兵」から考えるフランス革命・ナポレオン・ウィーン体制時代」と題して試みさせて頂いた。19世紀ヨーロッパの自由主義・ナショナリズムはもとより高校世界史の重要なテーマであるが、中東欧については、自由主義以上にナショナリズムの高揚に

力点が置かれているといえよう。京都大学の 2018 年度入試問題第 4 問のリード文に次の一節があった。「フランスにおいて典型的に実現されたとされる「国民国家」は、ヨーロッパ内外を問わず政治的なモデルと見なされるようになった。これが近現代の世界におけるナショナリズムの大きな源流のひとつである。1848 年にハプスブルク帝国内に噴出した民族の自治や独立を求める動きや、イタリアとドイツの統一国家建設は、「国民国家」という新たな規範がヨーロッパの政治に与えたインパクトを物語るものであった。」このようにもとらえられる近代ヨーロッパ史を学ぶ高校生の一助にもなればと願い、授業を構想した。

「二人の擲弾兵」*Die Grenadiere* は、ハイネの詩に、シューマンが作曲したドイツ歌曲である。ナポレオンを熱烈に崇拝するフランス人兵士の物語詩は『歌の本』(1827 年刊)に収録された(岩波文庫版の訳題は「近衛兵」)。歌曲の終末部分の旋律には「ラ・マルセイエーズ」が使用されている。授業では、まず、岩波文庫版の訳詩を、次に、学生時代の夏目漱石による文語訳「二人の武士 西詩意譯」を読んだ。続いて、「ラ・マルセイエーズ」のメロディを確かめた上で、ハンス・ホッターの歌曲独唱を聴いた。高校生には、鑑賞を通して時代の雰囲気を実感的につかみ、加えて、詩中の擲弾兵を作者、訳者、作曲者、歌手がどのように見ているか判断してもらうよう努めた。ナポレオン時代のドイツの状況と考え合わせると、作品から、ナポレオン、また、フランスのナショナリズムに対するドイツ人のアンビヴァレントな感情が読みとれるように思われる(ハイネのユダヤ系という出自は暫く措く)。この愛憎併存を想像すればフランス革命で生まれたナショナリズムはよりよく理解されよう、そして、このような視角は高校生の近代中東欧史の学習に役立つだろうと期待したのだが、手際の悪い説明に終わってしまったと反省する次第である。

大学教員による授業は、早稲田大学の中澤達哉先生の講義「自由主義・ナショナリズム再考 ～民族自然権原理を通じて～」であった。スロヴァキアでは、シリア難民問題が 2016 年の議会総選挙の争点となり、選挙後、難民受け入れに反対する政党を中心とする連立政権が成立した。その間、受け入れ反対の政治家は論拠に「自然権」を持ち出していた。中澤先生によれば、「自然権」の前提には 19 世紀に唱えられた「民族自然権」がある。これは自然権享受の主体が個人から民族に転換されたものであり、ハプスブルク帝国内部の少数民族だったスロヴァキア民族の抵抗原理であった。19 世紀の自由主義・ナショナリズムが生み出した「民族自然権」が 21 世紀に難民排除のイデオロギーとして現れたことになる。先生の所論は、さらに、ナショナリズムの暴力性と構築性をめぐる近年の学説状況(自由主義自体の排外性、ネイションの近代論・構築主義など)、また、「民族自然権」問題の発展的論点(民族自決権への転成過程、近現代の日本との関連など)に及んだ。筆者の担当部分では、「近代の中東欧」という主題にもかかわらず、東欧はハプスブルク帝国の一部として間接的にしか扱えなかった。自由主義とナショナリズムの関係への踏み込みも甘かった。中澤先生は筆者の授業の弱点を適切にフォローし、午前のプログラムをタイトルにふさわしく完成させて下さった。

中澤先生の講義終了後、若干の時間の余裕があり、即興的に、講座第二日を担当された古谷大輔先生が登壇され、中澤先生とのかけ合いのコラボレーション講義が実現した。

午後の研究協議では、国民国家論に関心が集まった。「虚構の言説が後世に真実として用いられ、歴史を動かしていく局面がある」旨の中澤先生のコメントがとりわけ印象深い。そのほか、「東欧」概念も話題になった。「東欧」は 18 世紀にドイツのオリエン研究から生じた概念であるという。協議には古谷先生も出席し、発言された。ジャコバン主義がもたらした歴史の断絶という見方を興味深く拝聴した。スウェーデンが「ジャコバン主義の王国」だった時期があるという。桃木至朗先生は、総括的な講評において、文明・文化の伝播、国家形態などからみた、高校世界史におけるアジアとヨーロ

ッパの比較史的考察の可能性を示唆された。

このたび、中澤先生、古谷先生、桃木先生、澤野理先生・神田基成先生・中山拓憲先生をはじめとする神奈川県歴史分科会の先生方、小林克則先生・石橋功先生をはじめとする NPO 法人神奈川歴史教育研究会の先生方に種々御指導御配慮を頂いた。ここに、改めて心からの感謝の意を表する。



<おわりに>

この高大連携講座で、長年、アジア史に取り組んできた大きな理由の一つとしては、ヨーロッパ中心史観の克服というテーマがあったといえるでしょう。そして、その試みはある程度克服されたと私は考えております。ヨーロッパが経済的に世界の中心となりえたのは 18 世紀後半のことで、それまでは中国・インドを中心とするアジアの国々が豊かな経済力を誇っていたということを私は教えられました。この講座に継続的に参加していただいた人や、最新の研究に目配せしていた人にとっては、アジアが歴史上、豊かな地域であったというのはもはや当たり前のことになりました。授業でも、そう知った視点で教えることになりました。丁寧に見れば、大学の研究者が記述している教科書にも、そういった記述は書いてあります。

それでは、今、この講座で、ヨーロッパ史をなぜやるのかということについては、上の報告を読んでもいただければわかるかもしれませんが、少し書かせていただきます。昨年度の講座も同様でしたが、従来の高校の授業でのヨーロッパ史とは違うものになっていると自負しております。一つには、コーディネイターとして、この高大連携講座に最初からかかわっている桃木志朗先生に引き続き参加していただき、アジア史の蓄積を踏まえたヨーロッパ史になっていると思います。今回の講座でも、ヨーロッパ単体の授業ではなく、アジアとの関係についても述べられている講義がありました。また我々はヨーロッパ史を学ぶ際に日本の近代化のモデルとして学ぶ傾向がありますが、そういったヨーロッパ史自体の見直しを迫る内容になっていたと思います。初日の中村講義では、イギリスでの選挙は「男らしさ」を確認する場として機能し、そのためイギリスでは女性参政権が認められるのがかなり遅れたという話がされました。2 日目の古谷講義では、近代の富国強兵モデルから外れる地域として北歐が取り上げられました。イギリス、フランスの様な列強と呼ばれる国とは違う国の形があったのかということに驚きました。中澤先生の講義でも、西欧とは違う東欧の「自然権」について述べられました。

おそらく、この研究報告が皆様に配られるころには確定しておりますが、来年度の高大連携講座は「現代のヨーロッパはどう教えるか」(現代は第二次世界大戦前まで)をテーマに行うことになると思います。多くの先生方の参加をお待ちしております。

